

Triumph onedollar ～勝
利への放浪者～

リューヤ

シーバルー行きの船のチケットを手に入れることができたにもかかわらず、当の船が既に出港を
してしまってシーバルーに行くことができない。しかも次の船が到着するのが3日後、一行は強
制的にこのジルコンで足を止めることとなってしまった。

その日の夜はジンが買って手に入れた例の2000万Lを有意義に使い少しグレードの高い宿で
宿泊することとなった。今まで泊ってきた安い宿屋のほとんどは無表情のフローリングに硬いベ
ットと板きれ同然のテーブルしかなかったが、この宿屋は一風思考の変わった内装をしているこ
とに一行は驚かされた。草を編んで床板の様に敷き詰められた「畳」と暖房設備まで取り付けら
れた低いテーブル「こたつ」といった今までに見たことの無い家具を見せられ思わずテンション
が上がってしまう。部屋に一步足を踏み入れた瞬間に漂う草の香りが強いリラックス効果を発
揮し、ジンが自然とタバコを吸う事をやめてしまったぐらいだ。

ただこの日は偶然客が多く入っていたために個人部屋をとることができなかつたので、大部屋を
二つ取り珍しく男女別々の部屋で雑魚寝となった。荷物を置くなり生れて初めて見た畳の上を
ごろごろ転がって遊ぶアゲートをジンが踏みつぶし、続いてドクターまでもが座布団でひっぱた
いた。

虎眼が言うには、この独特の家具や趣向はドルゴ大陸に伝わる古い様式らしく、最近になってこ
のジルコンでも人気が出てきている「ジパングスタイル」というインテリアデザインらしい。
この日の夕食もまたジパングスタイルに則った独特の料理が振る舞われた。食材もドルゴから仕
入れた物をふんだんに利用した豪華な懐石料理に舌鼓を打ち、全員目の前の料理に箸が止まら
なかった。ちなみに、食事の際は全員が男部屋に集合し、「浴衣」という寝間着に着替えて食事
を楽しみながら今後の予定について話し合っている。

「というのが、今の俺達の現状という訳だ」

今回の司会進行は、ひと眠りしたことで入れ替わった虎眼となっている。神妙な面持ちで真剣に
話しているが、彼の口からのびているエビの天ぷらが緊張感を破壊している。

「今後の予定についてだが、次の船が到着するまで3日。おそらく船は丸1日かけて海を渡りシ
ーバルーへ到着、さらに1日停泊したのちにまた1日かけてここへ戻ってくるってところだろう
。その間俺達はここでジッとしているしかできないのだが・・・って貴様ら」

額に血管を浮かべ、ガリガリとエビのしっぽまで平らげながら周りを見ると・・・思った
通り誰も自分の話を聞いちゃいなかった。アゲートとジェットは見たことの無い異国の料理に夢
中になってガッツきまくり、ドクターは食べたことの無い魚の切り身をうまそうに食い、ジンは
料理よりドルゴ産の珍しい清酒をチビチビ飲んでいた。虎眼としてはかなり真剣になって話して
いるつもりだったのだが、ここまで聞く態度が悪すぎると怒りを通り越して逆に笑いたくなっ
てくる。握る箸がメキメキを悲鳴を上げていることに気がついて箸を置くと、
なんだか無性にため息が付きたくなってきた。・・・はあ。

「……まあいい。とにかく出発は3日後だ、各々自分の準備を整えておくように。以上！！」

もう知らんと言いたそうな表情で無理やり話を終わらせると、虎眼のヤケになって一升瓶の酒をラッパ飲みした。なにはともあれせっかくの豪華な宿と豪勢な飯なのだ。ここで楽しんだって何の罰は当たりっこない。

シーバルー行きの船が到着するまで、後2日

ぶ厚いカーテンを開けると、今日も明るい太陽が全身を照らして寝ボケた頭に喝を入れてくれる。時刻は7時32分、この日一番に目覚めたのは意外にもジェットだった。ポーっとした瞳で後ろを振り返ると、隣の布団ではいつの間にか猫眼が居座って寝ていた。しかも布団を抱き枕の様に抱えて何やら寝言を呟いている。どうせまたドクターとイチャイチャしてる夢でも見ているんだろう、興味も無い。

どうせあと二日は暇なんだ、今回は彼女に視点を置いて話を進めてみようと思う。

本名、ジェット・アメジスト。性別女。年齢二十歳。職業、炎の魔術師。現在ラプチナ王国公認冒険者の一員として世界に散らばってる宝石を探す旅の途中。性格、非常に男勝りで短気なため女に見られない難有り。

改めて自分の服装を見直すと、悪い寝相のせいで寝巻きの浴衣がグチャグチャになっていた。仕方なく帯を締め直して服装を正すと、思わず自分の女らしさの欠片も無い一番の原因を見下ろしてしまった。ガキの頃は躍起になって牛乳をたらふく飲んだが、何の効果も無く現在までに至っているこのまな板の様な胸。猫眼のと見比べてみたらもう山脈と平原の差だ。今さら自分の女について自覚することも無くなってはいるのだが、なんとなくため息が漏れてしまう。

思い出した様に腹が鳴り、空腹を訴えるので仕方なく猫眼を起こし、男部屋にも乱入してまだ寝ている連中をたたき起こすと、そのままの勢いで朝飯にありつくこととなった。今朝の朝食もジパング形式の食事で、昨日の夕飯とは違って質素だが寝起きの腹には優しいシンプルな料理で全員の意識が覚醒された。

「んで、今日の予定は全員どうするんだ？」

今朝の進行役はジンだった。虎眼が猫眼に変わってしまったので自動的に次の指揮権がジンに移動するシステムになっているようで、本人も仕方なさそうに自分から話を振っているわけなのだ。

「ちなみにオレは本屋に寄ってから鍛冶屋で剣の調子を見てもらうつもりだ。次、アゲート」

「オレっち？んん～・・・オレっち特に予定もないから、今日はここで全力で風呂に浸かってダラダラするさ」

「じゃ、全員の荷物番を任命する。ドクターは？」

「小生は昼間でその辺をブラブラするさ。この街は珍しい物が多いからねえ、キシシシ」

「じゃあ私も付いてくネ！」

「お前らのペアはいつも通りな訳だなと・・・。最後にジェットは？」

「アタシも散歩。午後の行動は気分決めらあ」

「よし、じゃとりあえず昼間で解散」

こんな調子で今朝の朝食は終わった。

さてと、どこへ行ったらいいものやらな・・・

朝食を済ませるとジェットはすぐに部屋へ戻り、浴衣から着替えて外へ出て行った。着替えと言ってもいつもの服装ではなく、ローブだけ脱いで白いTシャツにズボンだけという何の特徴も無いラフな服装だ。現在は朝から活気付いている街の中をブラブラと何も考えずに歩きまわっている最中である。普段から持ち歩いている魔術発動の媒介となる杖は宿に置きっぱなしにし、代わりとなる携帯用の小さいステッキをベルトの間に挟んで店の中を覗き回っている。

娯楽屋、雑貨屋、武器屋、魔法屋、土産屋、食糧卸市場。何処を回っても面白い物も無ければ興味を引く物もない。自分に趣味を持っていないのも原因の一つなのだろうが、こう退屈すぎると時間が流れるのも遅く感じてしまって仕方がない。読みたい本もないが、しばらく立ち読みでもして時間をつぶそうかと考え近くの本屋を探してウロウロしていると、ちょうどいいタイミングで前方から暇つぶしのいいカモが歩いてきた。

「ヨ～イ、そこのお姉ちゃ～～～ん？ひ～とり～なの～？」

耳にネバっこく纏わりつくような声と共に、茶髪の男が肩を揺らしながら近づいてきた。

「オレちゃんさ～、さっきまで付き合ってた彼女にフラれちってさ～？心が傷ついてんのよね～？慰めてくりないか～い？」

「・・・はあ」

漫画でしか読んだことの無い下らな過ぎる誘い文句に対し、大っぴらにため息が出てきてしまった。もうちょっとマシな奴なら付き合っても良かったかもしれないが、この分だと後20秒も持たないな。

「わかった、慰めてやるよ・・・ただし」

15cm程の小さなステッキを抜き先端を唇にあてがった。さらにそのまま大きく息を吸い込むと、男の顔面へ向かって口ウソクの火を消すように息を吹きかけた。ただの粋ならお茶目で済んだだろうが、相手が魔術師だったのが運の尽き。吹き出された息はステッキ先で炎へ姿を変え、男の顔面を焼き払ってしまった。ジェットの得意とする炎系の簡単な魔術の応用だ。

死なない程度に燃やされた男の顔面は真っ黒に焦げてしまい、整えられた茶髪に至っては焼き払われてパンチパーマへ姿を変えてしまった。

男は何が起こったのかもよく解らないまま気絶し、石畳の上に仰向けでぶっ倒れてしまった。

「アタシの炎に慰めてもらいな、カス男」

周囲の唾然とした視線をものともせず臭いキメ台詞を吐くと、ステッキを元の場所に仕舞って散歩の続きを始めた。

冷たい潮風がサァッと静かな音を立て肌の表面を撫でると、緑色の髪がフワッと舞い上がって目を隠した。そう言えばここしばらくになってだいぶ伸びてきたこの髪、ガキのころから動くのに邪魔だったからずっと短くしてきたこの自分の髪。親にももっと髪を伸ばして女らしく振舞ったらどうだと言われたが逆にヤケになってショートにし続けてきたガキのころを思い出すと、なんだか自分のことなのに笑えてきた。ポケットの中を弄ると、中にあったのは1000Lが2枚と小銭が少し。髪を切るくらい金はあった。丁度いいので床屋を探すために町の中を歩き回ることにした。

「ザけんじゃねえぞコラア！！」

突然近くの船着き場から大きな怒鳴り声が周囲一帯まで轟いた。もめ事の臭いを嗅ぎつけて興味のわくまま進行方向を転換し、まっすぐ船着き場まで駆けて行った。

騒ぎの場となった船着き場には、すでに駆けつけていたヤジ馬共でごった返していた。何が起こったのか皆揃って興味を持ち、騒ぎをただ傍観しているだけにしてもこの数は意外と凄い。ジェットも人ごみの中を必死にかき分けながら一番見やすい先頭まで無理やり体をねじこませることができた。そこで見えたのは、やたらと図体がでかい男と針金みたいなヒョロヒョロした男が二人で、たった一人の金髪の青年に掴みかかって喧嘩になっている最中の光景だった。

「兄ちゃん、人にぶつかったらまず御免なさいって誤ることを知らねえのかよテメエは？」

「おまけに、おいらの足まで思いっきり踏んづけて無視して歩き去ろうなんざ頭どうかしてんじゃねえのか？」

どうにもよくあるタイプのトラブルに巻き込まれているらしい。針金男がズイズイと汚い顔を寄せながら金髪兄ちゃんを脅そうとしている。しかし金髪の砲だつて負けてはいなかった。

「何を言っているんだい君達は。ボクにぶつかってきたのは君達の砲で、僕が足を下ろした先に自分の足を置いていた君の方が悪いのではないのかね？謝罪を要求するのなら、僕よりも君の方が頭を下げるべきだ」

金髪は男二人に全く臆することなく、むしろ正面から喧嘩を売るような真似を شدした。本人は全くその気は無いようなのだろうが、この一言に反応しないバカはいないに決まっている。その度胸に対し、ジェットは感心する様にピュー〜ッと口笛を吹いた。

「人をバカにするのも大概にしろやコラア！！！」

「もう土下座したって許さねえぞクソ野郎がああ！！！」

針金が懐に手を伸ばし、大男が巨大な拳を固めて親戚の様に金髪の顔へめがけてパンチを振り下ろした。しかし金髪はそれでも微動だにせず、ジッと棒立ちになりながら拳の行く先を見守る様

に睨み続けている。野次馬が全員が瞬間的に恐怖を感じ、一斉に目を閉じた。

ドゴオオオオオオン！！！！

爆発に匹敵する凄まじい轟音が轟いた。人を殴ったにしてはあまりに大き過ぎる音だ、誰もがそう思ってゆっくりをまぶたを開けると・・・・・・そこにはさっきまでいたはずの大男の姿が影も形も無くなっていた。しばらく時間をおいて、上から人が叫ぶような声が聞こえたと思って見上げれば、一瞬だけさっきの大男と思われる人間が火だるまもなりながら海へ落下してしまった。ポカンとした表情で男が溺れている海と逆の方向を見ると、野次馬の先頭で小さなステッキの先端から煙を吹かせながら立っている緑髪の女が立っていた。今起こったことを整理すると・・・・大男の拳が金髪にぶつかる直前、とっさにステッキを抜いたジェットが炎の魔術を発動させ大男を撃沈。この間わずか2秒足らず、驚異的な反射速度であった。ちなみに今発動した魔術は「ブラッティ・メアリー」、爆発系の中級魔術だ。

「へへへ・・・・オイ金髪！テメエのその度胸気に入ったぜ」

ニヤリと不敵に笑うと、悠々とステッキを回しながら二人に近づいて行った。

「テ、テメエ一体何者だ！？近寄るんじゃねえ！！！」

魔術を知らないのか、謎の現象驚いてビビっている針金男が懐から手を抜くのと同時に、手に握っていた物をジェットへ突き付けた。それは見たことの無い四角い鉄の塊の様で、先端には小さな穴が空いている。

「・・・・・・なんだそりゃ？」

「にしししし、シーバルーで手に入れた「ピストル」って言うここいらじゃまだ出回ってねえ珍しい武器さ。クタバレやクソ野郎！！」

言うや否や、そのピストルとかいう物体から凄まじい音が響くのと同時に、視認不能はスピードで小さな弾が発射された。

ジェットの頭部が大きく後ろへ傾き、バランスを失った身体が崩れて背中から地面へ倒れてしまい、そのまま立ちあがる気配が消えてしまった。

「ひひ、ひひひひひひひ。馬鹿な野郎だな」

「・・・・・・そりゃお前だバカ野郎」

男の顔が笑ったまま固まった。男は確実に発射した弾丸がジェットの頭と貫いたと確信していたのだったが、現実は全くのウソ。ジェットはまだ生きていた。高く突き上げた両足を勢いよく振

り下ろした反動で一機に立ちあがると、服に付いた埃を軽く払いながら再び針金を睨みつけた。

「テッ！！！！テテテテテテメエエエ、何で生きてやがるんだ！！！！」

「ピストルねえ・・・要するにボウガンみたいなものだったってことか。まァ、こんなチンケな玉で死ぬようなアタシじゃねえけどな」

ジェットはつまらなそうに手の中に収まっていた物をコインの様にピンと弾いた。それはさっきピストルから発射されたはずの弾丸だった。ジェットはこれまた何らかの方法で弾丸が直撃する一歩手前で受け止め、バランスを崩して頭から地面の上にコケたにすぎないようだ。自分の中に合った常識が音をたてて崩れ落ちるのを感じ、針金は顔が青ざめてしまった。

「それともう一つ・・・・・・・・アタシは「野郎」じゃ無くて「アマ」じゃボケナスがああ！！」

弾丸を親指へあてがうと、凄まじい勢いとパワーではじき飛ばした。ただ飛んだだけなら何の問題もないのだが、弾丸は今さっきピストルから発射された時とほぼ同じスピードで針金の太ももを貫通してしまった。全くわけのわからないまま激痛が右足に走ると、足元がもつれてバランスを失いさっきの大男と同じように海に落ちてしまった。

喧嘩の一切が終了すると周りから拍手が上がったが、ジェットはさっさと帰るように野次馬連中に追い払い船着き場はすぐに静かになった。

ステッキを仕舞い、ジェットはそのままボーっと立ちすくんでいる金髪の元へ歩いて行った。

「よっ、散々な目に遭ったなお前」

「あ、ああどうも。ありがとうございます」

金髪はジェットよりも少し高い身長をしており、恩人を見下ろすように頭を下げてれを述べた。少しこの男を観察してみると、今まで見てきた村人や町人とはだいぶ風貌が違うのが解る。サラサラとした太陽の様に明るい金髪に蒼い瞳、少し顎が細いが整った顔立ちと自分とは永遠に縁のなさそうな上等な品質の服装。明らかに周りとは違う良い物を食って生活している様子が滲みでており、ホッソリした体で足も長い・・・俗に言うところのイケメン体格ってやつだ。

普通女ならここでキャーなんて声の一つも上げるのかもしれないが、ジェットにとっては興味も湧かないただの男にしか見えなかった。

「何があったのかは知らねえが、度胸だけは大したもんだ。そういう奴は結構好きだぜ」

「それは光栄です。ボクはトニックと言います、あなたはなんとお呼びすれば？」

「ただの通行人Aだよ。気をつけて帰れよ～」

面白い暇つぶしもできたし、これから床屋を探す用事だって出来たのだ。ジェットはそのトニックと名乗る男に背を向けると後ろ手にヒラヒラと手を振りながら立ち去った。

しかし予定が狂う事になった。そのジェットの手をいきなり掴まれたのだ。

「あなたにはシッカリとお礼がしたいのです、是非とも！」

トニックは意外と力強くジェットの手を握りながらニッコリ微笑みながらそう言った。一瞬誘いに乗るべきか否か迷い、時刻を確認するとまだ10時を過ぎたばかりだ。床屋なら午後にも行けるだろうからいいや、という安易な考えからジェットはせっかくなのでトニックの誘いを受けることとした。

この時、もっと深く考えておけばあんな面倒くさいことにならずに済んだものを・・・とは、知る由もなかった。

しばらくの間二人は歩きながら話を進めていくと、トニックの人間模様がしだいに理解できてきた。

トニックの家族は一週間前にここへ引っ越してきたばかりで、今はこの街の土地感を養うために歩いていたらしい。そんな時にあのガラの悪い連中に絡まれ、ジェットが助けたのだ。元々はラプチナから東へ離れた大陸、「クロニケル」に住んでいて家も結構裕福な家庭だと言っている。そしてもうひとつ……

「それにしても今日は何て素晴らしい日なんだ、こうやってジェットさんとボクが会う事が出来るなんて……」

「大袈裟だ。アタシただの根なし草の魔術師だよ」

「とんでもない。あなたの様に美しい女性と巡り合えるなんて……ボクはこの出会いに、運命を感じます！」

……またこれだ。

さっきからトニックは手を自分の胸に当てて熱弁しているのだが、ジェットは口からイメージの塩を吐き出していた。美しいとか、運命の出会いだとか、今どきセリフが少女漫画の様に臭っさいセリフばかりで嫌になってくる。ガキの頃から乙女チックな話題が大嫌い、そんな言葉を耳にするだけで口から塩とか砂糖とか砂を吐き出して嫌悪することがとてつもなく多い。(表現的イメージの話だつてば)

「ジェットさん、あなたもこのボクと運命を感じますよね？」

「いや、ちっとも」

彼女はとにかく自分に嘘をつく様な事が無く、自分に真っ正直なのが売りだった。しかしトニックはこの予想をはるかに上回った返答のせいで全身の機能がまるで電源が落とされたかのようにピタッと止まってしまい、笑顔のまま完全に固まって動きが止まってしまった。コイツのもう一つの特性、時々機能が停止する。

しばらくの間動かなくなったトニックに合わせてるように、ジェットも立ち止まって再起動するのを待つこととなってしまった。さすがにあのキツパリさに関しては少々ハッキリ言いすぎたかもしれないと反省し、頭をポリポリ搔いている。

「ヤッホー、ジェッター！」

そんな時に聞き覚えのある高い女の声が聞こえた。まっすぐこちらへ走ってくる声の主はのは、やはり猫眼で当たりだ。その手には何やら色々な物が詰まった紙袋が抱えられている。

「ジェッター、こんな所で何してるカ？」

「いやまあ、ちょっとな」

とりあえずトニックがまだ機能を停止させている間に、今まであったことをザラッと簡単に説明してやった。途中で紙袋から出てきた肉まんを二人でつまみながら話し終えると、猫眼はなぜかジェットの肩に手を置いた。しかも何か知らないが気持ち悪いくらいにニヤニヤした表情をしている。

「クククク・・・ジェット、我が妹分よ。私は義姉として嬉しい限りネ」

「は？何の話してるんだテメエ・・・ってかいつアタシが妹になったよ？」

「この一日だけでもいい・・・幸せを謳歌するがヨロシ！！」

何か謎の言葉を残し肩から手を離すと、紙袋からもう一個肉まんをお土産に手渡して背を向けた。猫眼は両脚に気合いを注入すると一気に跳躍し、店の屋根をバッタの様にピョンピョンと飛び跳ねながら消えてしまった。

「なんなんだよ・・・ったく」

何が起こったのかいまいち理解ができないまま、貰ったもう一つの肉まんをほうばった。

あれからさらに3分くらい時間がするとようやくトニックの意識が再起動し、また二人は会話を続けながら歩き出した。

「ジェットさんはどのような仕事をしてるのですか？」

「まあちょっとな・・・なんつうか、探し物を探す旅って感じかな？」

「ほう、かなりアウトドアな仕事なんですね」

「いやいやいや、アウトドアって表現なってんのか？・・・あ」

今度は急にジェットが動きを止める番になってしまった。今まで話に興味が向いて気付くのに完全に遅れてしまった。二人のまさに目の前に、今この状況を見られたくない男ナンバー2が立っている。口から煙を吐き出し、本屋で買ったらしい本を小脇に抱えているのはジンだ。ジンは猫背でタバコを加えながら、首だけをこちらに向けてジ〜っと見ている。

「・・・・・・・・」

(ヤッベエエエ！！)

「どうかしましたかジェットさん？」

ジェットがどう言い訳したらよい物が困惑している間に、ジンがツカツカとこっちに近づいてきた。そしてしばらく固まっているジェットと金髪を交互に見比べた。

「・・・・・・・・」

ジンは終始何も言葉を発することなく煙を吐き出すと、持っていた本をなぜかジェットに手渡した。震える手で本を受け取ると、ジンはそのままジェットの脇を通りすぎる様に歩き去ってしまった。去り際に立った一言、「安心しておけ・・・」と残して。

「・・・・・・・・誰です、あの人？」

「は、はははは・・・・・・・・はあ。・・・・・・・・ん？」

ジンに渡された本に目をやると、本のタイトルは『鬼嫁放浪記』。どうも四コマ式のギャグ漫画の様だった。

すぐにジェットは本をジンの背中へ向かって投げ返した。

「ジェットさん、ココが僕の家です」

案内されたトニックの自宅は、背景に「ドーン！」なんて擬音がよくにあるくらい大きく豪華な家だった。今までこんなに大きな邸宅はラプチナ城以外見るのはもちろん初めてで、驚いて開いた口が閉じなくなった。

「・・・・・・・・（ポカン）」

「遠慮する必要はありません、どうぞ中へどうぞ」

背中をポンポン押されて家の中へ導かれるままに門をくぐってしまった。

「おかえりなさいませ、トニック様」

玄関をくぐったとたん、すぐ目の前に黒いスーツを完璧に着こなした若い男が出迎えてくれた。一瞬服だけでジンかと見間違えてしまったが、全く違う人物なのを確認してホッと胸をなでおろした。まず見た目の年齢が違うし、第一ジンはこんな笑顔を見せたりしない。

「トニック様、そちらの女性は新しいお友達でしょうか？」

「ちょっと違いますね、ボクの恩人です。彼女にお茶とお菓子の用意をお願いします」

男は深々と頭を下げると、ジェットに少しだけ笑顔を向けて立ち去ってしまった。どうやらこの家の使用人らしく、本当にお茶の準備に言ってしまったようだ。使用人なんて初めて見た。

それから先はトニックに家の中を案内された。床のあちこちには大層高そうな絨毯が敷かれ、歩くたびにフカフカと足の裏に気持ちのいい感覚が伝わった。壁や階段の踊り場には大きな絵が飾られている。しかし決して目立った配置ではなく目立たない、支援名は位置で飾られているのが少しだけ気に入った。後になって聞いた話だが、ここに飾られている絵画は全て有名は画家に頼んで書いてもらった最高の一品であり、名画と呼ぶにふさわしい作品らしいのだがそこにまで興味は湧くことが無かった。

もう少しの間屋敷の中を歩き回ると、今度は部屋の中へ案内された。広く日回りも良いこの部屋には長テーブルとイス、そしてなぜかオープンキッチンが設置されていた。これだけ大きな屋敷ならキッチン位別で専用の部屋にあるものだとばかり思っていたが、なぜだ？

しかしよく見ればテーブルにはすでに誰かが座って一人でチェスをたしなみ、キッチンにも誰かが立ってドリップコーヒーを注いでいた。

「父さん母さん、ただいま帰りました」

「あらトニックお帰り。あなたもコーヒー飲む？」

「おおおかえり。話は聞いているぞ、そちらのお嬢さんがお前の命を助けたとか？」

どうやらこの二人がトニックの両親の様だ。ッて言うか命を助けたってなんのこっちゃ？なんか話が太袈裟な方向に傾いている気がしてきた。

「使用人に聞いた話では、何だね。あなたがうちの息子に襲いかかってきたギャング二人組を命をかけて戦い、助けてくれたとかで」

全く身に覚えがございません・・・・・・・・。

そもそもそんな大それたことをした覚えもない。何処でどう話がこんがらがればこんな誇大妄想100%の話が出来上がってしまうのか不思議でならない。ってかギャングって何だっつーの？

「いや～息子は幼いころからギャングやマフィアに金目的で誘拐されそうになってしまう事が多くてな、本当に助かりましたよお嬢さん」

本当に物凄い人生を送ってきてるのな、御宅の息子さんは・・・・・・・・。なるほど、あの程度で怯まないのも頷けるわ。波乱万丈は少年時代を過ごし、幼くして数々の修羅場をくぐりぬけてくればそんな所そこのゴロツキなんか怖くないに決まってる。

「あのう、ギャングっつーか、フツーのチンピラなだけで・・・・・・・・」

「アラやだ、もうこんな時間。ご飯はまだですよ？一緒に昼食でもいかがですか？」

ダメだこりゃ。この息子あってこの親あり、誰もジェットの話なんか聞いちゃいねえ。何か嫌気が差してきて一度ここを出ようと交渉したが、全くジェットの意見は眼中にないらしく4人分の昼飯の準備が始まってしまった。

「ああ〜〜〜ったく、どうしたもんかなあ・・・・」

ジェットは今誰もいない部屋にい通されてソファの上で胡坐をかき、ついでに頭も抱えていた。昼食の誘いを止むなくOKした途端さっき玄関にいた使用人が現れて3階にあるこの部屋まで連れてこられた。トニックは母親と料理の手伝いとかいってここにはいない。使用人がこの部屋を出て行く際に持ってきてもらった胡桃を握りしめて砕いた。

このままここには何かとてつもなく嫌な予感がする。窓から脱走を試みたがここは建物の3階、地上から約15m以上も離れた場所にいることを思い出して脱出を諦めた。危うく自殺するところだったのを踏みとどまることができて息が持漏れる。

普段から持ち歩いているあの杖があればこんな所さっさと飛んでおさらばできたのだが、生憎杖は宿に置きっぱなしときた。非常用の折りたたみステッキならあるが、こんな魔力の通しの弱い携帯ステッキでは飛行は望めない。

オマケになぜか部屋を出て行こうとしたらなぜか扉が外からカギがかけられ出て行くことすらできない有り様だ。いっそのこと扉を焼き払って強引に脱出もできるが、後でこの家が火事でもなって損害賠償の請求でもよこされたら内蔵売り払っても作れない金があることになるだろうから燃やすこともできないし・・・・。

万事休す、絶望的な状況下とはきっとこういう事を言うのだろう。

そうしてさっきからここからどうやって逃げるかを考えているうちにもう1時間が過ぎてしまった。まったく脱出行への糸口が見つからないまま、ただ無駄に時間ばかりが流れてゆくのにとうとうイラ立ちさえ覚えてきた。

・・・・カチャン

ちょうどそんな時に、扉の外側カギが外される音がハッキリと聞こえた。ゆっくりと扉が開かれて外から姿を出したのはあの使用人だった。

「失礼します。食事の準備が整いましたのでお迎えにあがりました」

食事の誘いの様だ。使用人が礼儀正しく頭を下げるとジェットの警戒が消え、自然と手が伸びていたステッキを仕舞った。

「すみませんね・・・・。ところで使用人さんよう」

「私の事はどうぞグレイとお呼びいただいて結構です」

「あっそ。じゃあグレイさんよう、ちこっと頼みがあるんだけども・・・・この屋敷から出してもらってのはできるか？」

「おそらく無理でしょう。トニック様をはじめ、旦那様も奥様もジェット様を大変気に入っておられるようですし、せっかく用意した食事も無駄になってしまいますからね」

グレイと名乗る使用人は少しだけ表情を曇らせながらジェットの頼みをやんわりと断った。最後の希望の灯が消えてしまうと、ジェットの身体から力が抜けてしまいグレイの肩へ倒れてしまった。

「やっぱ無理なのかよ~~~~。オイヨイヨ~~~~」

ジェットはそのまま肩を押さえてくれるグレイの腕の中でギャングァン泣き崩れてしまった。流石に困り果てたグレイは紳士らしくポケットから取り出したハンカチでジェットの涙をそっと拭いてあげた。

「まあ直接協力はできませんが、影からこっそり助力程度は致しますので、とりあえず泣き止んでいただいても？」

「おう、悪いな」

泣くだけ泣いて頭の中をさっぱりさせると急に腹が減ってきた。とりあえずは一度飯にありついてから今後どうやって脱出をするか検討しても問題ないと捉え、使用人と共に1階へ降りて行った。

昼食の風景は、まるで団らん家庭を絵に描いたような、笑いが絶えない明るい食卓だった。トニックも、オヤジさんも、お袋さんまで常に笑顔で会話をしながら食事を楽しんでいる。ジェットはこの謎の家庭的空間に一步足を踏み入れる度胸は無く、トニックの隣で黙って昼飯の Pasta をすすっている。

この部屋唯一の出入り口にはグレイが笑顔のままじっと立っている。ハッキリ言うと周りが見えなくて食事に集中ができない。って言うかこの空間では喰う飯がまずい。

「ハッハッハッハ！ところで、ジェットさんはうちの息子のことをどう思いますかね？」

「ブッ！？・・・ゲホゲホ、いや、別にどうって・・・まあ度胸のある男だとは思いますが」

「それじゃあなたはトニックのそんなところが好きなのね？」

「好きっつうか・・・まあ気に入ってるかな？」

「そうですかそうですか。なら話は早い、結納は明日にしよう」

「はい、ボクも賛成です」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？

今なんか話がとんでもない方向に流れた様な気がしたが・・・・・・・・・・あれ？気のせい？

今なんつった？え、結納ってなんの話？っつーか明日ってどういうこと？

「ジェットさん、明日からはボク達と一緒に、ずっと幸せになりましょう！」

「・・・・・・・・へ？」

幸せ → 結納 → 婚礼 → 結婚 → 夫婦
→ 幸せ？

「ハアアアアアアアア！！！！！！！！？」

話があまりにも唐突過ぎて、もう頭の中が訳分からなくなっていって、とにかく叫ばずにはいられなくなった。困惑しているジェットに対し、バカ親子はニコニコと笑顔を絶やしてはいない。

「ちょっと待てやオイコラ！！何でそんな話の流れになってしまうんだよ！！？？」

「だってジェットさんも息子のことが好きなのでしょう？息子だってあなたを気に入ってるんだし、問題無いのでは？」

「いや好きってそういう意味じゃなくてだなあ！！」

「さあトニック、午後には忙しくなるわよ。早くご飯を食べていろいろ準備をしなくちゃね、服とか式場の手配とか」

「はい、母さん！」

「人の話を聞けやこのバカ親子共がああああ！！！！」

最悪の事態に突入してしまった。

昼食を終えるなりジェットはグレイに連れられてまた3階のあの部屋に閉じ込められてしまった。このままこの屋敷にいたままでは確実にあの気の速い上に訳の解らない馬鹿家族のもとに嫁ぐ羽目になってしまう。それだけは絶対に嫌だ、そんな運命を背負わされるぐらいならいっそのこと自殺を選んだって構わない。大体こんな形でせつかくの仕事を途中放棄したそなたらあの連中に笑われるうえに、憐れみに満ちた瞳で他人扱いされてしまう。それだって御免被る！

もうこうなったら腹をくくってやろう。ソファから飛び降りると一直線に窓へ向かい、平手を叩きつけるようにガラス窓を叩き開いた。高さ約15m強、風は南に向かって微風、脱出路はもうここしかない。何、失敗したって死んでしまう訳が無い、人間手物は意外と頑丈にできているんだ。せいぜい骨が2、3本折れる程度だろう。怪我は帰ってドクターに直してもらえば問題なし！！・・・なんて自分に自己暗示をかけつつジェットは窓のサッシに片足を置いた。

「スウ・・・ハア・・・。よっしゃあ！いざ、自殺未遂！！」

気合いを入れて勢いよく窓から飛び降りようとしたその直前、悪運の神が微笑んでくれた！ジェットの視線が何かを前方に捉えた。ピタリと体が止まり、その何かを確認するために目をゆっくりと細めながら目の焦点を調整する。

そいつは今飯屋の屋根の上にいるのだが（何でこんな所にいるのかは知らんが）、あろうことかそこには偶然にも今思い起こした中にいたドクターがいて、屋根の上で腰かけて何かモッシモッシ食っていた。一番こんな場面を見られたくない野郎だったが、もうこの際贅沢なんか言う気にはなれない。

ジェット、ナーウ・ゲット・チャー————ンス！！！！

「おおおいドクター！！聞こえるかああ！？こっち向いてくれえええ！！ドオオクタアアアアア！！！！」

ジェットは必死になって大声を張り上げたが、どうにも距離があるのと周りがうるさいのとで声が全くドクターの耳に届いていないようだ。ドクターはジェットの叫びを無視してまだ食い続けている。

何とかしてドクターに自分がここにいることを伝えなければならず、急いで簡単に見つけてくれる方法を考えた。今ここにある物を投げても届かないだろうし、あとある物は小銭と携帯ステッキ・・・。

「ステッキ・・・そうだ！」

ジェットの頭の上に閃きの豆電球が点った。ジェットはステッキを握って魔力を流すと、ステッキの先端を窓の外へ向けて魔術を発動させた。空に向かって飛んでいく赤い光は、船着き場で見せたあの「ブラッティ・メアリー」だ。

ある程度の高さに達したところで、光は空中で爆発し、周囲に花火の様な大きい音と煙をばらまいた。

この信号弾作戦は成功した。急に空から爆発音が響いたもんだから何が起こったのか確認するために、周囲の人間達が一斉に空を見上げている。その中の一人に、ドクターも交じってくれた。すかさずもう一度、今度はさっきより低い位置で魔術を起こして爆発させる。これを繰り返していると、ようやくドクターが爆発物の発射源であるジェット的位置を確認してくれた。

あ、今完全に目があった。ステッキを放り投げると、もう一度渾身の大声でドクターへ救援を要請する。

「ドクター———！！こっちだ、助けてくれえええ！！！」

今度はようやく声が届いたようだった。ドクターはよっころしょと重そうに体を持ち上げると、静かに両腕をキョンシーの様にまっすぐジェットの居る方向へ伸ばした。

直後、不意を突かれて背中を氷でなぞられた様などてつもなく冷たい悪寒が走った。自分の直感を信じて頭を引っ込めると、その直後、自分の頭上スレスレを何かが高速で飛来した音が聞こえた。ゆっくりとその場を数歩離れてから立ち上がると、さっきまでジェットが立っていた地点には10本の細いワイヤーと壁に突き刺さったワイヤーに繋がれているメスを確認する。

しばらく窓の傍で待っていると、ドクターが自分がうちはなったワイヤーと辿って屋根の上を跳ねながらこっちへ来てくれた。屋敷のすぐそばまで来ると今度はワイヤーを巻き上げ、昇降機のように身体が持ち上がって静かに3階の窓までたどり着くことができた。

「キシシシシ……。君は一体こんな所で何をやっているんだね？」

ドクターは部屋の中に侵入するなりワイヤーを巻いてメスを回収すると、目の前にあった上等なソファの上にふんぞり返ってテーブルに転がっていた胡桃をかじりだした。

「いろいろ込み入った事情で今ここで半監禁されてんだよ。とにかく今はお前に助けてほしい」

「キシシ、どういう事情なのか知らない内は何もしてやれることなど無いねえ」

「……ったく、解ったよ。まずは現状のおさらいから、簡単に話すぞ」

仕方なくジェットはドクターのされるがままに宿を出てから今に至るまでの現状ををある程度簡略化しながら話し終えた。当のドクターは本当に聞いているのか知らないが、さっきからテーブルの皿に盛ってあるクッキーをモシモシ食っている。

「……ってなわけだ」

「キシシ、話は対わかった……。まああれだ、小生に言えることはただ一つ」

ドクターは足を組み、普段は袖に隠れて全く見ることのできない手を、指を外へ出してジェットをまっすぐ指差した。別にどうでもいいが、胴た一の指は病気なのかと思うぐらい白く細い指をしていた。

「男引っかけて遊ぶのも大概にしろって話さ。キシシシシシシシ」

非常にワザとらしい、それでいて物凄く嫌味ったらしいムカつく笑い声がジェットの鼓膜を激しく振動させた。普段ならこの程度の事でも軽くプツンするところなのだろうが、今はこの現状の訳だしむやみにキレることもできない。暴れ出しそうな腹の虫を必死で押さえこみ、急いで頭の中に水をぶっかけて熱を冷まそうとジェットの体内が頑張っている。

「ああもう、とにかく頼む！！今頼りになるのはお前しかいないんだ！もし助かったら礼だってする、何だっていう事聞いてやる！」

こんなことを仲間内でするのは嫌なのだが背に腹は代えられない、ジェットはもう必死になってその場で土下座までしてしまった。ここまですればいくらドクターだって自分の必死さだけは伝わるはずだ。しかしハッキリ言ってこの格好は屈辱的だ、悔しいし恥ずかしい。

それだっていうのに……だ。

俯いていたジェットの視界の内に、ドクターの革靴が覗いてきた。ドクターは今、ジェットのすぐ目の前に立って真上から見下ろしているらしい。かなり屈辱だ。

「男女君……本当にそんな事を小生に言ったりして大丈夫なのかな～？」

真上からネットリとした気持ちの悪くなる粘着質な声がゲル状になって流れ落ちてきた。しかもドクターはしゃがんで口元をそっとジェットの耳まで近付けてくる。気色悪い。

「なんだっていう事を聞く？もし小生が肉体の解剖実験を望んだらどうする？新薬投与の人体実験に興味を持ったら？一生小生の実験用モルモットとして生きる様に言ったら、どうするつもりなんだい、男女君……キシシシシシシシシシシシシシシシ」

呼吸が聞こえ、吐いた息が耳に直接触れてしまうこの超至近距離でそんな質問がささやかれた途端、全身から物凄い汗が流れ落ちてきた。鳥肌が立ち、背骨に氷を詰め込まれたかのような悪寒が全身を駆け巡る。やりかねない、新しい知識に貪欲なこの狂った医者なら本当にやりかねない。もし本当にそんな事を頼まれた日には、自分はきっと……いや、考えたくもない。

だけど……

「ウギ……グウ……」

「さあ、どうするんだい男女君。それでも小生に頼るのかい？」

「……上等だ。自分で言ったからには、責任持ってやる……」

藁をもすがる気持ちで頼んでいるんだ、せっかく掴むことのできた藁をみすみす手放すわけにはいかない。例えその行為がどんな重い代償を払う結果となろうともだ。

「こんな所で旅を終わらせるなんて真っ平御免だ。また旅を続けられるんならモルモットでも何にでもなってやる。それが、アタシなりの覚悟だ」

声は少し震えていたかもしれない。しかしジェットは土下座の姿勢を崩して顔を上げると、物凄い剣幕で自分を見下しているドクターを睨み返した。

少しの間ジェットのカン付けを黙って真正面から受け止めていると、ドクターは踵を返してソファーにまた腰を下ろした。

「・・・君の礼に関しては後日検討しよう。多少めんどくさいが、小生が何とかしてやる。感謝したまえ」

「・・・恩に着る」

「キシ・・・いい加減君も立ちな、土下座のまま礼なんて気持ち悪い」

回りくどい上に少し嫌味っらしいが、ここに交渉が成立した。ドクターは軽く舌打ちをするとまたクッキーを一枚つまんで口の中に運んだ。なれないことをしたもんだから首元がかゆくてしょうがないらしく、ポリポリと首をかきむしっている。

良くなって結婚なんかしたんですか!？」

「・・・・・・・・あっちゃー」

今、トニックは言ってはならないことを言いすぎてしまった。ジェットの目の前は今まさにドクターの前髪のように暗くなり、トニックの手をそっと払って数歩後退した。

その直後だ。

トニックの目の前を、何かが風と小さな音と共に高速で通過した。ジェットはさらに表情を引きつらせてもう数歩下がることにした。

何が起こったのか知らないトニックが振り向くと、おぞましい物が視界の中に飛び込み全身が寒くなる様な悪寒が走った。

ドクターだ。ドクターは今上半身をダラリと力なさそうに前屈の要領で倒して立っている。しかもただ立っているだけにあらず、身体の表面から何か全体的に青い未知のオーラが滲みでており、煙か炎の様に空中に舞っている。

「・・・よく覚えておくんだなその金髪優男。これが小生と彼女が結ばれた理由と君には無い共通点だ」

今まで見たことが無いくらい怒っているのを、ジェットは肌で感じる事ができた。

ドクターが語るや否や、目の前でパラリと何か金色の糸くずが落下した。その糸には物凄く身に覚えがある。できれば違って欲しいを微かな祈りを込めながらそっと頭を触ると・・・予感的中。今舞い散ったのは思った通りトニック本人の髪の毛だった。しかも頭の両サイドが深く剃りこまれてしまっており、モヒカンみたいな髪型にされてしまっていた。

「髪が、ボクの髪が・・・！？一体何をしたんだあんた！」

自慢にもなるくらい綺麗な髪をこんなみっともない形にされてしまって怒らない人間はいない。トニックもキレてドクターに詰め寄った。

「キッシシシシシシシ・・・今切ったのは小生であって小生にあらず。コイツさね」

ドクターが奇笑しながらゆっくりと上半身を持ち上げるのと同時に、その犯人が現れた。

ドクターの表面を覆っていた青いオーラが一つに集結し、形を成し始めた。オーラはしだいに実体化をはじめ、表面の色が黒くなっていく。物質化が完了しそこに現れたのは、黒いマントを頭から被った人骨の化物、宗教画などで目にすることができるまさに「死神」そのものだった。ただ違う点は、この死神は大がまを携えておらず、代わりに両手に大きなメスのような巨大なナイフを握っている。

マントの中のシャレコウベが恐怖で歪んでいるトニックの姿を細くすると、まるで嘲笑っているかのように顎を上下に開閉してカタカタと無機質な音を立てている。

「紹介しよう・・・『ジャック・ザ・リッパー』（切り裂き魔）。小生が召喚した、「魔神」さ」

トニックはこの瞬間、完全に腰が抜けてしまい床の上に尻もちをついて倒れてしまった。

「ななな・・・何なんだ、一体それは!？」

「魔神だって言っただろ、ボケ」

するとトニックの背後からジェットの声が加勢してきた。グルリと首を回してみれば、ジェットの身体の表面からもドクターと同じようなオーラが溢れ出していた。ただしジェットのオーラは青ではなく、赤い色を成している。しだいにオーラは一か所に集中して今のドクターのと同じ現象が起き始めた。

ジェットの背後に現れたオーラの集合体は、かろうじて人間の姿をしているが、人間ではない。赤みを帯びた肌、盛り上がった全身の筋肉、岩の様に巨大で硬質的な両腕、先端が炎の様に燃え上がっている長髪と金色の髪止め、紅蓮に輝く瞳と鬼の様な相貌。

これこそがジェットの召喚した魔神、名を『プロメテウス』という。

ここで一度確認のために説明しよう、今二人が召喚した「魔神」とは、「魔術」とは何ぞや？

人間の体内には生まれたその瞬間から「魔力」を秘めているものである。人間の中から生まれる「魔力」とは即ち、「精神力」である。一定の修行を積み、精神力を体内から放出できるようになった時、「精神力」は初めて「魔力」へ生まれ変わる。魔力の放出ができるようになった人間の事を総称し、「魔法使い」と呼ばれるようになる。

初めの内に使える「魔法」は簡単なもので、物を浮かせたり動かしたり、せいぜいその程度のことしかできない。そこからさらに修行を積み、「魔力」を精錬すると魔力は強力な「エネルギー」へ変換され、エネルギーは「破壊の力」を生み出す。魔力のみを用いて物体を破壊できるようになった魔法使いを、「魔術師」と呼ばれるようになり魔法使いとしての格が上がる。

破壊の魔力は魔力を生み出した人間の精神力によってタイプが異なり、例えばジェットのような熱血的な性格の人物ならば火、炎属性の魔力が生まれやすくなる。

それでは本題、「魔神」とは何ぞや？

魔術師は精神力を鍛えることによって体内の魔力蓄積量が大きくなり、強力な魔術をより多く使用することが可能となってくる。その内の一つに「魔力の具現化」がある。杖などの媒介を通して魔力を流すと、放出された魔力は「魔術」へ変わる。これはその発想を応用した高等魔術であり、媒介を介さず直接体外へ魔力を放出し湧きあがった魔力を粘土細工の様に練り上げることによって、密度の高くなった「魔力」は「物質」に変換される。そして物質化した魔力の集合体を、「魔神」と呼ぶ。

「これがアタシとコイツの共通点ってわけだ。解ったかクソ金髪モヒカン野郎？」

「こういう事さね、キシシシシシ」

ジェットがトニックを見下して嘲笑うとプロメテウスも同様に嘲笑い、ドクターが奇笑を響かせるとジャック・ザ・リッパーもカタカタと口を開閉して笑っている。

通常のジン血をはるかに上回った非現実的な光景と恐怖で、トニックは完全にビビってしまいガタガタと震えていた。目の前には死神、背後には炎を纏った巨人、こんな二人に挟まれては誰だって泣いてしまうのも当然なのだ。

「つーわけで、お前はしばらくここで寝てろや？」

ジェットの一言を皮切りに、二人の魔神が動き出した。ドクターの魔神が日本のナイフを振り抜くと、トニックの頭が今度は一瞬で丸坊主にされてしまった。常人の目では追いつけない程のスピードと繊細でシャープな動きにジェットは感心した。打って変わり背後から襲ってきたプロメテウスがトニックの後頭部を殴打した。手加減はしたと思うのだが、この一撃でトニックは反対側の壁まで吹っ飛ばされて一瞬で気絶してしまった。見た目を裏切らないパワータイプの魔神にドクターは称賛した。

全ての作業が終了したところで、二人の魔神は体が崩れて元の煙の様なオーラに戻ると、それぞれの体内に逆戻りして消えてしまった。

「・・・さてと終わったね。疲れたので小生はこのまま帰る」

なんだか急にドッと疲れがやってきた気がする。ドクターは首を左右に回してポキポキ鳴らすと窓へ向かって歩いて行った。サッシの上になるとそのまま何の躊躇もなくそこから飛び降りた。本来ならこれだけで十分自殺行為なのだが、ドクターの場合は少し違う。あらかじめ床にワイヤーメスを刺しておくことによって伸びたワイヤーが命綱となり、ドクターはそれを掴むと壁を蹴りながら安全に地面まで降り立つことができた。同じ方法でジェットもワイヤーをしっかりと掴み、無事屋敷の外へ脱出することに成功した。

「いや～しかし今回はマジで助かったぜドクター、改めてサンキューな！」

ジェットは今までに見せたことが無いぐらいの笑顔でドクターにれを言うが、本人はソッポを向いたままワイヤーを回収している。

「・・・礼を言ってんだから無視すんじゃねえよ。つうかお前魔神を作り出せるほどの魔力を持ってたとは驚きだったなあ。ってことはお前も魔術使えんの？」

「昔ちょっとかじったぐらいの実力だよ・・・それはそうと男女君」

ワイヤーの回収が終わったとたん、ドクターがグリンッ！と首を回してジェットを見据えた。し

かもこの顔、いつもより顔の影が3割増しでより暗くなっている。気持ち悪さは10割増しだな。

「さっき言っていた例の事だが・・・忘れないようにしておくことだね」

「礼・・・・・・・・あ！！」

今やっと思いだした。さっきドクターに助けてくれたら何でも言う事聞くなことを約束してしまったんだっけ！？思い出した途端、ジェットの色が青ざめてしまった。

「キシシシシシシ・・・・しばらくの間この剣は保留だ。小生から君への「貸し」ってことにしといてやるからありがたく思う事だね、キシシシシシシシシシシシシシシシシシ」

そのままドクターは笑いながら立ち去った。

今さら何だが・・・ジェットは今日、とんでもない野郎にとんでもない「借り」が生まれた事思い知らされ、この後一体何が起こるのか分からない恐怖が生まれてしまったことを痛感させられた。

宿へ戻った後は、猫眼とジンに受けられた誤解を解くために必死で弁解し、夜は夜でドクターのあの奇笑が止まらない悪夢にうなされて当分眠ることができなくなってしまった。

おまけ

所有武器詳細

武器 バスターソード

所有者 ジン

全長 100cm

重量 2kg

説明 両手、片手持ちの両用の剣。片手半剣とも呼ばれる
片手剣と両手剣の中間の長さの剣で突く、斬るもできる混血の剣とも認識されることもある
ジンはこれを腰に左右一本ずつぶら下げて二刀流で闘う
剣の心得があるわけではないのだが、生れついてからの器用さで使いこなしている（これがきっかけで両利きになった）

武器 クレセントアックス

所有者 アゲート

全長 130cm

重量 27kg

説明 大型の戦斧、クレセントとは三日月の意味で漢字表記すれば三日月型戦斧と書ける
本来の斧とは薪を切るなどの生活必需品だったが、その威力が評価され武器へと変わった
体力が取り柄で大雑把なアゲートにはこの斧がしっくりきて気に入っている
攻撃が大味すぎるが故、隙が大きかったり周囲への無駄な被害が多くなるのが悩みの種

武器 魔導師の杖

所有者 ジェット

全長 125cm

重量 1kg未満

説明 ワンド、細長くまっすぐな手で持つのに適した道具で、長くて自分の足の長さ程度のもの
近年は金属やその他特別な物質を使用した物が多いが、霊的、魔的力を通しやすくするために木製が主流
御神木の枝から削り上げた杖にジェットお手製の魔皇石を仕込み、魔力の効果を数倍までに上げている

魔術発動の媒介、飛行時の乗り物として利用される

武器 ワイヤーメス

所有者 ドクター

全長 12cm

重量 数100g程度

説明 手術や解剖に用いられる刃物、大変鋭利でわずかに触れただけで皮膚が切れてしまう

ナイフという言葉の意味も持つがほとんど浸透はしていない

ドクターはこれを袖の中に5本隠し持ち、柄にワイヤーを結びつけて専用の射出装置で高速発射する

壁や天井に刺してぶら下がることもできる他、肉体に刺したワイヤーを介して魔力を送り操ることも可能

武器 ナックルダスター

所有者 虎眼 猫眼

全長 手のサイズ

重量 数10g

説明 拳にはめて打撃力を強化するための武器の総称

メリケンサックとも呼ぶ

虎眼の場合は指抜きグローブタイプの物で数個のボールベアリングが装備されている

本人達は攻撃力の強化より、拳の保護ぐらいの意味にしか使われていない

武器 仕込み靴

所有者 猫眼 虎眼

全長 足のサイズ

重量 2kg

説明 靴の底に鉄板を仕込んだ特注品の靴

鉄の重量の分、攻撃力は格段に上昇している

足技が基本の猫眼は虎眼よりも重い靴を履いている

元々は攻撃目的ではなく鍛錬、防御のために作った品

もう一個おまけ

トライアンフワンダラーにおける世界観

舞台：地球とは別の次元に存在する有機生命体が存在する惑星

住民の容姿はヒューマノイドタイプ、文明の発展過程は著しく違いがみられる

大陸の数=国の数、「ラプチナ」「シーバルー」「ドルゴ」「クロニケル」の通称「四大大陸」

大陸の生活環境により文明の発展がかなり違う

四大大陸

ラプチナ大陸

- ・世界で二番目に小さい大陸、全体の気候は秋。特殊文明、『魔術』の発展が著しい特殊な大陸
- ・首都は大陸中央北部「モリオン」。治安は安定しているが街の外には未だに山賊などがうろついている
- ・自然界から生み出された特殊な石、「魔石」「薬石」が唯一採掘されるのがこの国。魔術は生活の利便化や医療など様々な分野に枝分かれして発展
 - ・一年を通して穏やかな気候に恵まれ、山や森と河に囲まれ食物は野菜や山菜の栽培が有名。名産品は野菜のピクルス
- ・大陸間の異文化交流が最も進んでいないせいでド田舎扱いされがち

シーバルー大陸

- ・世界で二番目に大きな大陸、全体の気候は夏と冬。ラプチナとは反対の文明「機械技術」が発達している
- ・首都は大陸の西部フェイファー・ツェザリカ軍本部「カノン」。治安状態はひどいくらい悪く、貧富の差、真人間と悪人の差がはっきりしている
- ・自然環境が最悪のため無い物は自力で作りに上げる精神で築き上げられた技術、「機械、兵器」が最大の自慢
- ・この国を統括しているのは「国と兵士」ではなく「軍と兵隊」である。軍隊は大陸全体にいくつも存在し担当地域を支配している。軍隊同士は仲が悪い
 - ・大陸全体の南半分は乾ききった岩と砂の支配する灼熱、北半分は全面氷と雪の極寒地帯という相反するふたつの異常気象を持つ異常大陸
- ・この特殊環境故か、他の大陸には存在しない凶暴な生命体「ドラゴン」が多種多様な生息
- ・名産品は鉄より高級なドラゴンの鱗や牙、爪を加工した品々と様々な戦闘兵器と武器

クロニケル大陸

- ・世界で最も小さい大陸、全体の気候は春。豊富な薬草から発展した「医学、薬学」が発達している長寿大陸
- ・首都は大陸南部「ラフレシア」。世界一平和で穏やかな国で、「新婚生活と老後を平和に過ごしたい国」25年連続No.1を最大の自慢とする
 - ・ラプチナ大陸以上に恵まれた大地を誇るこの大陸には薬草が豊富に自生しており病気の回復率が世界一速いとされている健康の国
 - ・存在している街はラフレシアただ1つと言っても過言ではなく街一つが巨大な首都とされ、周囲には小さな集落くらいしかない
 - ・山は少なく平野が広がり、家畜の飼育などにも適している。名産は自慢の薬草をブレンドした「健康薬草ジュース」
 - ・他国との文明交換を積極的にこなしており、わずかにも魔術と機械が共存している

ドルゴ大陸

- ・世界で最も巨大な大陸、全体の気候も土地ごとにバラバラ。異文化交流の塊にも見える大陸
- ・首都は中央西部「クレイモア」。他の三大大陸の文明が一堂に会した、別名「オールシェイクアイランド」（ごちゃ混ぜの国）
- ・土地柄により文化も気候も異なる故、土地ごとに名前をつけて区別している
 - 北ドルゴ：気候は冬。わずかな魔術文明が栄えるラブチナ寄りの文明を持つ土地
 - 東ドルゴ：気候は春。一年を通して温暖な土地。山が多くクロニケルに近い文明を持つ
 - 西ドルゴ：気候は秋。唯一他の文明とは異なる異国の文化、風習を持つ古風な土地。大昔の原住民文化を持つ
 - 南ドルゴ：気候は夏。シーバル寄りの土地柄。年中熱く、本土程ではないがドラゴンも生息するが皆小型ばかり
- ・治安はそれぞれの土地ごとに違うが、部分的な人口密度の過剰増加と過疎化に悩んでいる
- ・西ドルゴこそがドルゴ大陸における唯一の文化だが、他からは理解しにくい部分も見え隠れしている（要は古臭い考え方という意味）
- ・名産品は西ドルゴ産の民芸品。独特の形や模様、色使いに定評がある

明朝7時。これから後1時間後にはこのシーバルー行きに往復船が出港する時刻になってしまう。入船口では荷物を担いで船から降りたり乗ったりしている人でごった返していた。その中に我らが一行も紛れ込んでいる。

受付係員に乗船チケットを人数分渡すと、係員がそれぞれの切符にパチンと小さな穴を空けると小さなハンコを押して返してきた。

「それでは良い旅を」

係員の完成された感情の無い作り笑顔に唾を飛ばしてチケットを受け取ると、ジンはふとこれから乗る船を見上げた。

灰色に近い黒で統一された外見のペイントはもとより、初めて間近で見た時はまずその巨大さに圧倒された。この分厚い鉄板で装甲された船の大きさは、ドクターに聞いた話によると全長は約200m、海面から甲板までの高さだけで20m、中央に建てられているのは乗船客を退屈にさせない客室を除き、食堂から娯楽まで様々な施設を盛り込んだ雑居ビルの様なメインキャビン。これだけですでに35mの高さがある。肝心の船室は船隊の中にあり、窓はこの表面の鉄板のせいで塞がれてしまい景色を楽しむもクソも無い状態にあるらしい。その理由は海上で万が一トラブルが発生した場合に備え（昔は主に海賊の強襲が多かった）船内に大砲や砲弾をドッサリと積み込んでいるためであり、窓を無くすことによって外からの侵入を阻止させるのが目的なのだとか。ちなみにこの船の名前は「ピースメーカー」と呼ばれている。

元々はシーバルーに所属していた軍艦で、海上保安の目的で開発された当時無敵を誇る最強の船だったらしいのだが、技術の発達と共に巨大戦艦は衰退されさらに強力でコンパクトサイズな軍艦の開発が進められるようになってしまった。引退を余儀なくされたこの船も後は解体されるのを待つしかないと思っていたのだが、そこへ当時のラプチナ王国国王の発案によってラプチナ・シーバルー間を移動する連絡船となり、それから末長く生きることができるようになった。戦場を離れた老兵は、その後ふたつの文化と文明を運ぶ橋の役割を担い、姿を変えてこれからも活躍するのであった。

実際この船を使用してからという物、海賊の襲撃数は激減、返り討ちにした回数は数十回と目覚ましい功績を叩きだしている。外見から与える抑止力も元軍艦名だけあって最高品質であり、余程軽い気持ちでこの船を襲おうとするバカはいなくなったという。

ま、豆知識に関してはこのくらいで十分だろう。そんなわけで、この船がラプチナ大陸とシーバルー大陸間に広がる海、「トルマリン」を丸一日かけて航海するという話なのだ。昇降用のタラップをカンカンと昇りながら、ボ〜っとそんな事を考えていた。

「う〜ワクワクするっさ！！オレっちこんなデカイ船に乗るのも海に出るのもこの国の外に出るのも初めてさ！スッげー楽しみさ〜！」

ジンの真後ろで子供の様にはしゃぐアゲートのテンションに若干イライラしながらタバコをくわえ直した。いちいちウザいったらない・・・。

外装から見て船室の方も大体予想はしていたが、やはりその通りだった。甲板から階段を下りた先に待っていたのは、極み抜いた殺風景な廊下と飾り気の欠片もない無個性な部屋の扉ばかりだった。唯一ある物と言えば天井にまばらに設置されているランプのみ。古びた木製の扉にはそれぞれ番号の振られた金属プレートが打ちこまれており、自分のチケットに記入されている番号が自分の部屋となっている。今回チケットに振り込まれた部屋の順番は以上の通りだ。

105号室・ジン 106号室・ドクター 107号室・ジェット 108号室・虎眼 109号室・アゲート

今回はアゲートとは一番離れた場所をキープすることができたので、夜は久しぶりにぐっすり眠れそうだとジンはホッとできた。

錆付いて建てつけが少し悪い扉を開くと、内装も期待していた通りだ。硬そうな木製の薄いベッドにテーブルとイス、そして申し訳程度の小さなクローゼット。天井には簡単な照明器具が一個だけ。・・・想像していた通り過ぎて、逆にがっかりしてきた。

早速荷物を放り投げてベッドに腰を落とすと、思いっきり寝ころんでみた。・・・やっぱりベッドはこれくらい硬い方がジンにとって寝心地が良かった。

トントントン・・・。

「ジン、俺だ」

外からノックしてきたのは虎眼の声で間違い無さそうだ。ジンが入室許可を下ろすよりも先に、虎眼はドアノブをひねって勝手に入室してきた。なんだか怖い顔をしている。

「なんの用だ？」

「これからの旅について、いろいろ話しておこうと思ってな」

虎眼は椅子に座ろうとはせず、閉じた扉のすぐそばで腕を組みながら壁にもたれた。今日はいつもより眉間によっているしわの数が何本か多いので、きっとかなり真剣で重要な話をしに来たのだろう。

「すでに聞いているかもしれないが、シーバルーはこのラプチナの様に平和ボケしつつある国とは全く違う。とにかく治安が悪い。そしてこの国には存在しない砂漠や氷河もある。今まで以上に厳しい旅・・・というよりも、本当の旅はシーバルーについてからだ俺は思っている。」

一人旅の経験が長い虎眼にとって、この話はかなり重要な内容の筈なのだが・・・対するジンの方が全く話を聞く気が無いらしくベッドの上でさっきからグデ〜っと伸びている。その危機感の無い態度にはさすがに怒りを覚えた。

「・・・ったく、聞いているのか貴様は？」

「一応耳には入ってるよっと・・・でもよう、だからって今からそんなに力んだってしょうがねえだろうよ。最終的には状況に合わせて臨機応変、計画なんて結局はめあすなんだしよう」

「・・・・・・・・はあ。そんな態度でよく旅をしていこうと思ったものだな貴様は」

ベッドから年寄りくさそうに体を起こしながら話したジンの自論に、虎眼は呆れてしまいため息がこぼれた。

呑気にタバコをくわえようとするジンに見かね、虎眼も壁から背中を離した。

「とにかくだ、一応経験者の意見を言わせてもらうがお前の言うその「目安」だって大切な話すなんだ。これからどうやって歩いていくか今の内によく」

ドカンッ！！！！

今度はノックも無しに突然扉が開かれた。しかもものすごい勢いで。今度部屋の中に無断で上がりこんできたのはアゲートのようだ。

「ジーン！！もうすぐ船が動き出すって言ってたさ！一緒に甲板に行って海眺めるっさ！！」

・・・初めての船旅でテンションが上がるのはいいが、今のアゲートにはもうそんな余裕はないだろう。

「アゲート、ゆっくりだ。ゆっくり扉を閉めてみる」

「え？なんで」

「いいから、ゆっくりだぞ」

何が何だか分からないが、言われるがままにアゲートは扉を静かに閉めてみた。

この部屋の扉は基本的に内開きになっている。つまりドアのすぐそばに立っていようものなら一撃で開かれたドアの餌食となって鼻血の一滴だって流れる。

もちろん、今回の件は虎眼が該当する。

扉が完全に閉じられた時アゲートが見たもの・・・それは、突然の一撃のせいで怒りを通り越しもはや人の顔をしていない虎眼の姿だった。生れて初めて悪魔を見たアゲートはすくみあがり、涙と鼻水を流しながら全身をガタガタと震わせた。

「ア～～ゲ～～～～ト～～・・・」

「・・・・・・・・ごめんなさああああいよいよ！！！！」

「待たんか貴様ああああああ！！！！！！」

二人は錆付いた扉を破壊しながら部屋から逃走、命がかかった鬼ごっこが始まるのだった。

後に聞いた話だが、虎眼に捕まえられたアゲートは虎眼の手によって骨を数本砕かれたらしい。

クソ重たい鉄扉をこじ開けると、ジンの身体に強烈な風が正面からぶつかってきた。立った数十m昇っただけでこれほど風が変わるとは知らなかったが、風を堪えながら甲板に出ると今度は風邪の勢いだけで開きっぱなしになっていた鉄扉が閉じられた。しかしいざそとに出てしまうとさっきまでの風は吹いておらず、かえって心地よい潮風がジンの肌を横切って気持ちいいくらいだ。船はいつの間にかすでにジルコン港を出港していき、海の上を堂々と走っている。

この船には帆が付いていない、ジンの中のイメージではこれほどまで大きい帆船は対外大きな帆が何本もたっており風を受けて走っているイメージがあった。何でもこの船にはシーバルーの特別な技術で生まれた機関「エンジン」なる物がいくつか積み込まれているのらしい。そのエンジンが動力源となり、スクリューを回して船を動かしているんだとか。未知の技術力に最初はちょっとだけ感動していたが、エンジンって代物は魔術とは違ってかなり内容が複雑で細かく、ガイドブックを読む気が失せるので途中で放り捨ててしまった。

甲板にはすでにジン以外にも数人の乗客が海の景色を楽しんでいた。しかしここにも大砲が何門も床に固定されていたため、壮大な景色がいささかシュールになってしまっている。そんな中、よく知っている奴が離れてゆくジルコンを眺めているのを発見した。あの方に担いでいる杖で解る、ジェットだ。

「おう、お前が感傷に浸るなんてらしくねえんじゃねえの？」

「まあな。けどどやっば自分の生まれ育った国を離れるとなると、やっばこう込み上げてくる物があるんよ。寂しいっつうか、なんていうかよく分んねえけど」

言葉の通り、ジェットはいつものような元気もなくどこか寂しそうな目で笑い、甲板の手すりの上に乗かった。今までの行動を見てきているだけに、このような姿は特にらしくない。

「いつ帰れるのかもわからねえこの仕事。こうやっていざ離れてみっとよう、いろいろ思い出すもんだよなあ。昔まだ村で魔術の勉強してた頃の自分とかよう」

「なるほどな・・・確かに懐かしいな、オヤジと毎晩戦争になった晩飯のおかず争奪戦」

人が柄にもなく感傷に浸ってるって最中に、ジンの雰囲気やぶち壊す思い出話のせいでジェットは手すりから転び落ちてしまい、危うく海に急降下してしまうところだった。

「いてて・・・お前なあ、もっと親や家族に対して思い出す様な事とかねえの？マジで」

「ああ、早く死んでくれねえかなあのクソ親父。とっとと寿命が尽きてしまえばいいのに、マッハで」

切なそうな表情とは裏腹に、文字通り裏腹に、ジンの発言は親に対する敬いの欠片も無かった。あんまりにも真剣にジンがボケるものだから、ジェットも仕方なく思いっきりズッコケておいた。どうにもジンはオヤジの事が本気で嫌いなようだと思改めて認識する。（まあ自分の息子を鎖で簀巻きにしたのち引きずりまわすような人間だし、無理もない）

なにはともあれとりあえず、これから先20時間以上は船の上で生活することになるので、その間物凄く暇になるわけだ。ジンは甲板を後にすると階段を上り、メインキャビンへ足を運んでみることにした。このキャビンは三階建てで、それぞれの客が退屈をしないで済むような施設が整えられている。一回に入ると、ルーレットやスロットマシンを始めとした、人間の欲望の集合施設「カジノ」が設置されていた。中を歩いて見るとすでにラプチナへの興味が失せた強欲な人間が何十人も集まってお互いのコインを賭け合って億万長者を目指し勝負をしている。一歩足を運ぶたびに、あのイカサマギャンブラーのことを思い出してしまい気分が悪くなるので、こんな所はとっととオサラバしようとしたら、途中でまた知り合いを見つけた。今度見つけたのはチビの白髪頭、ドクターだ。タバコに火を点けながら近づいて見ると、どうもドクターはパチンコに勤しんでいる様子だ。

「・・・何やってんだお前？」

「キシ、メガネ君かい？見ての通り小生はシーバルーでの軍資金稼ぎさ」

振り向きもしないでドクターは答えた。パチンコ玉が機械の中で発射されるとうまい具合に弾かれてチューリップの中に落下し、スロットが回転する。自動停止したスロットがたたき出した数字はなんと怒涛の777。溢れ出たパチンコ玉はたちまちドル箱を満たし、床に重ねられてゆく。・・・て言うかこいつ、ドル箱がもう10個以上重なってるのはなぜだ？

「キシキシキシ・・・確変が止まらないのも困りものだね、そうは思わないかいメガネ君？」

「知るか」

呆れたジンはそのまま煙を残り香にしながら立ち去ってしまった。その後もドクターの確変は止まらず、最終的にドル箱が24個までなったことは、特に話とは関係ない。

今度は一気に3階まで上がってきた。両開きの木製扉をあけると、自然の光がジンを照らした。眩しかったので手で光を遮りながら見待たすと、目の前には大量の本が詰め込まれた本棚がゴロゴロと轟めき合って並んでいた。ここは図書館らしい。さらに良く見ればすぐそばに個人テーブルと長テーブル、ソファまで設備されており、もう何人かが座って思い思いの本を読みふけている最中だった。一応まさか・・・と思いながらざっと館内を見回すと、運のいいことにここには知り合いの顔がどこにもなかった。

天井は全面ぶ厚い硬化ガラスで覆われているため太陽の光がサンサンと降り注いでいる。屋内にいる筈なのにやけに眩しかったのはこのせいだ。

ジンはテキトーな場所を選んでコートを目印に置き、読む本を探しに本棚の迷路へ突入した。天井まで達してしまいそうなくらい高い本棚の中にはありとあらゆるジャンルの本がズラリと揃えられている。文庫本から厚もの、小説に漫画、歴史書、自叙伝、有名な作家の作品に無名作家のデビュー作、何でもある。本を読むのは好きだし、生れてこの方本はかなり読んできたつもりでいたが、これだけの数を目の当たりにされるとジンの読書量はまだ足元に及ぶか否か微妙なところだと思われ、なんだか楽しくなってきた。

まだ見たこともないような本を探していると、興味をそそられる一冊を発見した。題名は『トリップ・クロス～贖罪の十字架～』とある。基本的のどんなジャンルの本でも読むのが好きなジンは早速本を片手に席に戻った。座ってから落ち付いて表紙を見てみると、血に塗れた人間が巨大な十字架を高く掲げている。不気味さの中から生まれる美しさ、ジンはそんな宗教的、あるいは象徴的な美術も好きなのでこの本はハッキリ言ってかなり気に入った。内容も面白そうで、過去に罪を重ねた一人の神父が過去の清算をするために戦いぬく様子を描いた物語らしい。期待に胸を膨らませて、いざ熟読開始！

「そこのどいてくださああああい！！」

図書館内における最大のご法度、大きな声にせっかくの読書を邪魔されてしまいムカついた。しかも声は結構すぐそこ、もはや隣に等しい。何処のバカが騒いでいる物やと睨みを利かせて見ると、真っ先に飛び込んできたのは、無数の宙を舞う本の嵐。数秒間、ジンは何が起こったのか記憶が無くなってしまった。

結果から述べると、目の前から降ってきた本の雪崩に巻き込まれたジンは、そのまま本の下敷きにされてしまったのだった。顔面をはじめ、全身を駆け巡る痛みを耐えながら本をどかして起き上がると、余計に怒りが込み上げてきた。

「どこのどいつだコラア！！？オレに喧嘩売るんだったら買ってやるから覚悟しろクソヤロウが！！」

突然過ぎる奇襲に我を忘れかけたジンは、あの時の虎眼ほどではないが顔が般若化し始めている。グルングルン首を回してこんなフザケた事してくれた犯人を捜すと、意外なくらいあっさり見つけた。犯人は今現在、ジンのガニ股状に開いた足の間で倒れて目を回していた。

「本当にすみませんでした・・・」

事故現場から離れた場所に小さな噴水とベンチがある。そこに二人は座って犯人がジンに対して頭を下げていた。

ちなみにこの噴水はリラクゼーション効果の一環として最近察知されたオブジェで、この広い図書館のちょうど中心にある。後になって気が付いたのだが、この図書館は心を落ち着かせて非常にリラックスした状態で読書ができるような工夫が施されていた。噴水のほかに観葉植物が多数、オマケで細く小さな水路が壁沿いに流れてマイナスイオンで満ち溢れている。小川のせせらぎもよろしく、多くの読書家が万全の体調で読書に集中できた。

そんな中でまだジンはむくれてそっぽ向いて

「あの、その、本当にごめんなさい。私、本読むのが好きで・・・たくさん読もうと思って、本選んでたら・・・いつの間にか数が凄いことになって、足元がフラフラして、」

気付いたころには抱えきれない程の数ってか？どんだけ本好きなんじゃテメエは・・・なんて言い返してやりたい気持ちはあるのだが、ここは大人らしく口には出さないで置いておこう。本人の言う通り、二人の足元にはジンの持ってきた本を含めて本の山が築かれている。その数やなんと24冊、一日でそんな数か読めると言うのであろうか？

「えっと、今さらかもしれませんが、どこかお怪我は？」

「(本当に今さらだなこいつ) 別にどうってことねえ」

強がってそうは言ったが、実際は頭に辞書クラスの大きな本がぶつかってできたコブがあるし、転んだ拍子で足首をひねって今もまだ軽く痛い。でも今さらになってそんな事を言う気にもなれない。ジンはちらりと目を向けて犯人を見直した。

よりもよって、コイツ女だった。しかもまだジェットよりも年下の様なガキ臭い匂いが漂っている。しかしとことんガキという訳でもなく、まだきっと17~8くらいだろう、大人と子供のまさに中間地点の整った顔立ちをしている。ジンと同じくらいの長さの髪はツヤツヤとした紫色、だけど前髪だけは事もあろうかドクターと同じように長く伸ばして顔を隠してしまっている。ドクターと違うところは、顔が隠れていても表情が簡単に読めてしまうことくらいだ。

「そうですか、よかった」

「・・・あのよう」

「はい？」

「人と話をする時くらい顔突き合わせて相手の目を見て話した方がいいのと違うか？」

もうさっきから気になっていて仕方が無いことをジンは言い放った。彼女のその見ているだけで強制的に思い出されてしまうドクターの顔がチラチラと視界の隅に出てきて正直イライラしてきた。指摘された本人は急にこじんまりとしぼんでしまい、胸の前で指を絡めながら聞こえないような声で何かボソボソ呟いている。しばらくは様子を見ていたが、もう限界だ。イライラが積みっぱなしだったジンの堪忍袋の糸は、プツンとキレてしまった。

「だあもう、面倒くせえなあ！」

じれったくなって彼女の肩を掴み、側まで引き寄せると反対の手で彼女の長い前髪を一気にたくし上げてしまった。

髪の毛に隠されていた彼女のお顔は、ジンから見ても決して卑下できる様なものではなかった。髪の毛と同じ透明な紫の大きな瞳、細いあごと表面に浮かぶ少しのそばかす。女に関して興味を持たないジンでも、十分水準の高い顔立ちをしていると言う事が解る。

「んな顔隠して話したって解るかっつうの。面だって小綺麗にしてんだからもっとその目に自信持ってみろっての」

彼女はしばらくの間蠟人形のように動きが固まったと思ったら、今度は急に顔全体が茹でダコのように真っ赤になって毛穴から湯気まで噴き出してきた。

そしてさっきまで見せていたとろ臭さからは考えにくいほど俊敏且つ素早い動きでジンから離れてしまった。手の届かない場所までにいゲルと手榴で捲くられた前髪を元の位置まで戻してしまう。

「・・・何してんだ？」

「あ、あああああの・・・ごごごめんなさうい！わわ私人と顔合わせるのが苦手で、顔だって全然綺麗じゃなし、そばかすだって・・・恥ずかしい、です」

「・・・・・・・・」

なんだかやっちゃまった気がしてならなくなってきた。どうにも彼女は極度の恥ずかしがり屋と見て間違いなさそうだ。素顔を晒すのが苦手だったから、ワザと前髪を伸ばしてあんな髪型にしていたのか。

急にバツが悪くなったジンの目は回遊魚の様にあちこちを泳ぎ回り、延びっぱなしの腕は行き場を失って宙をさまよっている。

「ああ～・・・なんだ、悪かったな。こういうのもなんだが、自分でそんな格下げするほど酷い顔じゃねえじゃんか、むしろオレとしては・・・えっと、結構可愛いて感じだな。・・・うん、そう思う」

とりあえず頭を下げて謝罪し、同時にフォローを入れてからジンは自分の本を広げて誤魔化すように読書モードに突入した。しかし今やってしまったことが気になりすぎるのと罪悪感とで、本の内容が全然頭の中に入ってこなかった。だからジンはさっきから本を読みながらチラチラ彼女が見ていることも、遥か向こうの本棚の影に隠れていた視線にもまったく気づくことができなかった。

「うっはー、高っけー！」

時刻はすでに12時20分を過ぎている。一時的に集まった一行はここ、二階の大食堂に集合している。普段はがらんとしているここも飯時になれば乗客100人のせいであっという間に込み入ってしまっている。一行もここでお昼を楽しもうとしていたのだが、テーブルに添えられているメニューをひたいた途端食欲が失せた。メニューに書かれている料理はラプチナの郷土料理以外にも宿でも食べた様な異国の料理も載っているのだが・・・いかんせん単品の値段が高いのなんのって。

地元では一般メニューだった肉と野菜のスープが一皿3000Lもしている、しかも一人前でだ。地元だったら食材を一から集めたって半額で済む値段だと言うのに、このベラボーな料金設定は何たることか。肉料理のコースに至っては6000L、一番安い魚料理単品でも1600L、コーヒー一杯で500Lもする。値段を目の当たりにした瞬間、真っ先にジェットが叫ぶのも仕方がない。

「確かにこいつは高いな」

「無駄に高い食材でも使っているのか、あるいはポッタくってんのかどっちだろうね？キシキシシ」

全員が料金だけで呆然としている最中、ドクターだけはなぜか上機嫌だった。さっきのカジノであれから各片が止まらず最終的に買った金額20万Lが入った袋を見せびらかすように抱えて笑っているのだった。

頭にきたジンはメニューを叩きつけると、コートを羽織って席を立ち上がった。

「どうしたジン、食わねえの？」

「この程度の料理にこんな金払ってられるか。売店でテキトーな物買って食う」

「それも構わないかもしれないが、売店にはまともな食いものは無かったよ」

「知った事じゃねえ」

かなりイライラしている口調のまま食堂を出て行こうとしたら、後ろから一人追いかけてくる影があった。それはいつの間にかまた入れ替わっていた猫眼だ。

猫眼は背後から細い腕をジンの肩にマフラーのように巻きつけてきた。

「・・・オレはドクターと違うぞ、何の用だ」

「ここから居なくなるなら都合いいネ。私の飯お前がおごるヨロシ」

今日の猫眼はいつにも増して珍しく命令形でジンに物申してきた。もちろんただでさえ機嫌の悪いジンはそんな命令を聞く気なんかさらさら無い。

「ザけんじゃねえぞコラ・・・何でオレがお前の飯おごんなきゃならんのだ？」

「ふーん・・・図書館での出来事、私みんなに話してもよろしカ？」

「・・・今何て言った？」

「年下の女の子に手をかけるの、よろしくないヨ。オマケに直接顔に触るなんて・・・ネエ？」

マズイ物を見られてしまった。あの時図書館で見えていたのはどうも猫眼だったようだ。もしもあの事を全員に話されでもしたら今後しばらく白い目で見られ続け、口もきいてくれなくなってしまう。こいつの事だ、どうせ話の内容もありもしないようなことを誇張して強調してあらぬ誤解を招くに決まっている。そういう訳にはいかない・・・

「・・・何が食いたい？」

「フッフ・・・このあんかけ焼きそばと野菜スープのセット、それとデザートに杏仁豆腐も食べたいネ。占めて7250L」

・・・普通に高い。だがしかし・・・クソ。

ジンは震える手つきで自分の財布から金を取り出して猫眼にくれてやった。猫眼はその金を受け取ると小さくウィンクで礼を言い、立ち去った。

あれから数分、売店で売っていたまともな食糧（サンドイッチ300L、パスタサンド350L、コーヒー牛乳230L）を購入し、ただいま甲板に上がって一人さびしく昼食を楽しんでいる最中であった。ラプチナ大陸はすでに姿が見えなくなり、見渡す限り海しかない。辺りには誰もおらず、この甲板はジン一人で貸し切り状態となっていた。しばらくの間この心地よい潮風をおかずにしばらく一人を楽しむこととした。

しかしちょうどそんな時に限って、どこかの誰かがあのクソ重い鉄扉をこじ開けて甲板に上がってきた。まアここは別にジン専用の土地でも無いのだから文句は無いのだが、一人でいたかった人間にとってこれは邪魔意外なんでもない。チラリとみると、身長の高い男だった。しかし体格に似合わず男の身体は細っかった。男はジンがいることに気が付くと、積極的に近付いて話しかけてきた。

「どうもこんにちは。あのう、失礼かもしれませんが、そこ隣いいですか？」

「・・・なんで？」

「そこ、ボクも目を点けていた場所なので・・・」

男は申し訳なさそうに自魔神の座っている場所を指差した。言われてみると、確かにそこには予約目印として設置されていたのであろう小さな旗が吸盤で床にくっつけられていた。旗には「ボクが座ります」と手書きで書いてある。最初は何にも気にしなかったがそんな意味があったとは知らなかった。あらかじめ予約されてたのなら仕方ない、ジンは素直にそこをどいて別の床の上に直接腰を下ろした。男も指令します、と一言断ってから自称予約席に座った。

こうして並んで座るとこの男がどれだけデカイのかよくわかった。足の長さも座高もジンより二回りは大きく、目は丸で寝ているのかと間違えてしまいそうなほど細い糸目。頭にはニット帽をかぶり、長く青い髪がサイドからはみ出している。そして注目したのが、ジンとまったく同じ袋を持った右手だった。

「・・・お前も同類か？」

「あははは、恐れ入ります」

これの袋の中身はおにぎり三つにお茶だった。やはりこいつも高い飯を食うだけの金が無い仲間みたいだ。

二人とも進みが実を開いて飯にかぶりつくと、何だお互いに笑けてきた。

「クスクス。改めましてなんですけど、ボク「コンバット・ベルグマン」と言います。あなたは？」

「ああ、ジンだ。コンバットだっけ？あんたもラプチナの人間なのか」

「ボクの事はコルトと呼んでください。ボクは隣のシーバルー出身です。ちょっと出稼ぎでラプチナにいたんですけど、今回はその帰りです」

フーンとテキトーに相槌を打ちながらサンドイッチを呑み込んだ。コルトも同様におにぎりをお茶で流し込みながら新しいおにぎりに手を伸ばす。

「ボクの生まれた村は山のずっと奥にあってですね、とても貧しい場所なのでこうやって積極的に出稼ぎに行かないと食事もできなんですよ」

「地元で働こうとは思わないのか？」

「ええ、ちょっと込み入った事情がありまして。それにシーバルーで出来る仕事はほとんど専門職ばかりだったので、素人のアルバイトにはとても・・・」

コルトはおにぎりをかじりながら自分の身の上話を笑いながら話した。別にそんな深く聞いてもないのだが、まあタマにはいいだろう。

「なるほどな。俺も山の中で生活してたけど、食糧にも困らなかったし、近くには王ともあったから生活は困らなかったな」

「羨ましいですね、そんな生活も」

それからしばらくの間、二人は飯を食いながら話に夢中になった。初対面の割に二人は気が合うらしく、ジンにしては非常に珍しく楽しく笑いながら飯を食う事が出来た。

それからほどなくして昼飯を終えると二人はそこで別れた。その後ジンは暇つぶしのためにもう一度メインキャビンの図書館へ足を運んでみることにした。本を読んでいる人はさっき来た時より少なかった。その中にはあの時迷惑をかけたあの女がまだいた。ジンは彼女の顔を見て少し驚かされた。午前中はドクターと同じ髪型だったのに、午後になると前髪を持ち上げて髪を一本に縛り顔が露出していた。話を聞くと「さっきジンに可愛いと言われ少しだけ自信が付き、恥ずかしいが思いきってみた」とのことだ。本を読もうとしたらさっきの猫眼の言葉が蘇り、本を数冊借りて図書館を出て行った。それから先ジンは夜になるまで一步も自分の部屋を出ず、本を読みふけた。

ポッポ〜と部屋中に鳴り響く船の汽笛の音で目が覚めた。化だかなりねむいと訴えている脳みそを揺さぶり起こして身体を持ち上げると、真っ先に目に入ったのは床中に散らばった本だった。どうも呼んでいる途中で眠ってしまったらしい。

毛布もかけずに寝てしまったおかげで体が冷たく、急いでコートをはおうと早速本を回収してテーブルの上に並べた。一仕事終える手ベッドにもう一度腰を落とすと急に腹が減った。時刻は7時半を過ぎている、仕方が無いか。

そこへ、今度はノックもせず扉が飛来で誰かが勝手に入室してきた。こんな礼儀知らずには今の所一人だけ心当たりがある。

「ようやく起きたか、ジン」

相も変わらず、朝っぱらから不機嫌そうな顔をしているのはやっぱり虎眼だった。虎眼は部屋中の状況を読み取ると軽く舌打ちをして例によってまた壁にもたれた。

「昨日の晩、今後の進路について話し合うとドクターも言っていたはずだが、お前の姿が無かったのは一体なぜだ？」

「悪い、本読んでたら完全に寝ちゃった」

ジンは少しも悪びれる様子もなく、悠々とくわえたタバコに火を点けた。それを見て、虎眼はまたため息がこぼれてしまう。

「まったく、そんな甘い考えはシーバルーでは通用しないぞ。計画を練り、慎重に事を進めればわずかにでもトラブルに出くわすリスクが減るんだからな」

「へ～へ～、悪ござんしたと・・・」

「・・・はあ。もうお前のことが解らん、いいかジン、シーバルーというのは」

ドバンッ！！！！

「ジ——ン！！シーバルーさ、やっとシーバルーについたっさあ！！」

またも例によって扉が勢いよく開かれ、またアゲートがテンションを高くして入ってきた。ガキの様にはしゃぐのも結構だが、ジンとしては朝のこの一服の一時を邪魔しないでもらいたかった。それはもとより・・・だ。

「・・・フゥ。アゲート、またその扉をゆっくり閉めてみる？」

「え・・・・・・・・？・・・・・・・・・・・・・・・・まさか」

同じパターンが入った。昨日と同じように扉をゆっくりと絞めると、扉の反対側で今度は魔獣と化した虎眼が鋭い眼光でアゲートを睨みつけていた。もちろん今回も鼻血が垂れている。

「・・・助しけてくれさあああああ！！！！」

「待たんか貴様あああああああ！！！！！！」

二人は部屋の壁を破壊しながら退室し、今日も朝から精子を賭けた鬼ごっこの始まりとなるのだった。

人ごみでごった返したタラップの上は、今回もまたとんでもなく歩きにくかった。オマケに熱気がムンムンしてやたらと暑い。最初は団体行動をとれていたはずなのに、気が付けは全員離れ離れになってしまったので入場ゲートで落ち合うこととなってしまった。鞆が何度かタラップにぶつかってカンカンうるさかったが、何とかあの人口密度の高い場所から脱出することができた。息を整えながら見回すとまだ誰もいない、一番乗りはジンだった。

呼吸のリズムがやっと落ち着いてきたところでまたタバコをくわえライターを探していると、目の前から見知った物が小走りでジンの元まで走ってきた。途中でつまずき転びそうになってのは、あの本の虫の女だった。大した距離でも無いのにやたらと息を切らしながらやっとジンの元までたどり着くことができた。

「ハア、ハア、ハア・・・あの、キョレ！・・・これどうぞ！！」

呼吸も満足にできないままセリフも噛んで彼女が一冊の本をジンへ差し出した。茶色い革製のハードカバーに掘られている本のタイトルは「ホーリー・トリック」とある。

「あ、ああああのこれ、私の持ってる本の中で一番好きな本で、えっと、そのよかったら読んでもりゃいくて・・・じゃない読んでみてください！！」

彼女はやけに顔を赤くして、声もセリフもアレな状態のまま本をジンの胸に押し付けてきた。何がなんだかよくわからないが、今は本がちょうどみぞおちに食い込んで苦しいためタバコを落としてしまった。

とにかくだ、彼女も何か知らないが必死になっている様子だけは解る。呆気にとられたまま本を受け取るとようやくみぞおちから両腕が離れてくれた。

「ええええっとそのあのえっと・・・この本絶対面白いんと思うんです！気に入ると思うんでう！・・・ああじゃ無くてじゃなくて！！」

なぜか先から両腕を請われた人形のようにバタバタと上下していると、どんどん顔が赤くなってまたあの時のように湯気が上がってきた。このままでは次の瞬間倒れてい舞う可能性も考慮し、ジンは一度落ち着く様に提示してやった。

「その・・・あうあう・・・えっと・・・あう」

「・・・？なんだよ」

「よ、よろしく願いしまぷ！！じゃなくてお願いします！！」

そのままひっくり返ってしまいそうなくらい勢いの良いお辞儀とわけのわからない言葉を残すと、彼女は振り返り超特急で立ち去ってしまった。もう人の渦の中に巻き込まれて姿も見えなくなってしまった。しばらくの間何が何やら理解が追いつかずポカンと立っていると、反対の人ごみ

の中から他の連中がやっと出てきた。

「キシシ・・・やっと見つけた」

「ヒィ、マジでキツイぜこの混雑は。・・・お、ジンなんだその本？」

ジェットがまだボーっとしているジンの手の中から本を横取りした。そこでようやくジンの目が覚め、連中が集まっていたことを確認する。

「ホーリー・・・これ何て読むんだ？」

「ホーリー・トリック。小生は知っているよ。この本、結構有名で最近ベストセラーになっているはずだよ」

「ほう・・・で、何で貴様はこんな物を抱えて立ってたんだ？」

あの時船室で見た時よりスッキリした表情の虎眼が本を買え石ながら尋ねてきた。

「ああ・・・なんか読んでくれって、さっき渡された」

「ふーん・・・誰にだい？」

「なんううか、昨日図書館で知り合ったガキの女」

「ホウ・・・何だよジンお前も隅に置けねえ奴だなコイツ」

「最っ強に馬鹿らしいからそういうことを言うな」

何か勘違いしているのであろう、ニヤけながら脇腹を小突いてくるジェットをハードカバーで殴り黙らせる。

溜息をついて本の肩に担ぐと、本から不自然な感触を感じた。もう一度目の前に置いてちゃんとこの本を見てみると、ただのシワかと思っていたがこれは革表紙の表面に加工が加えられて模様が彫られているようだったのだ。光の当て具合でも見て解るのだが、表面には大きな十字架のような模様が浮かび上がっている。ここまで見事な細工が施されているとなればきっと値段もするのだろう、そんな風に思って背表紙を開くと・・・そこにはとんでもない悪魔の文字が書き記されていた。

「ピースメーカー内図書館蔵書 船外持ち出し厳禁」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ヤベエ」

ラブコメ路線で攻めてみました

失敗臭がします

別にフラグではない

どうというオチも考えてない

ただし一人だけ除いて